

ねじりはちまき

5月 皐月(さつき) 立夏 小満の月になりました。

5月1日八十八夜です。3日憲法記念日、4日みどりの日、5日子どもの日と立夏が一緒です。21日小満です。

さわやかな日が続く新緑のまぶしい季節になりました。今年の暦の占いによると未方に歳破、乾方に暗剣の凶神が巡座しますので夏や晩秋には天候異変や、温暖化による季節感のズレが起きるのではないのでしょうか。または、暴風雨災害、洪水、小規模地震の暗示も出ています。緊急時に慌てないように対策準備をしておくことです。そして、『自然の大地に畏敬の念を持ち、恵まれた日々感謝する姿勢を失わなければ、必ず無事に過ごせます。』と暦に書いてありました。コロナに負けず元気な体で夏をお迎え下さるようお祈りしております。

幸田常一

\*\*\*\*\*

<会社近況>

5月に入りました。暖かくて気持ちのよい日が続いております。過ごしやすい良い季節になりました。

七十二候では蛙始鳴(かわずはじめてなく)の頃です。冬眠から目覚めた蛙が田んぼや野原で活動を始めて鳴き声が盛んになる頃。オスの蛙の鳴き声というのは、メスの蛙を恋しがって鳴くのだともいわれています。

家の周りでは田植えが始まりました。そろそろ、蛙たちの元気な声が聞こえてきますね。

さて、現場では現在二本松市の住宅修繕工事をお世話になっておりますが、間もなく完了いたします。事務所内では図面や見積書の作成などを行っているところです。連休明けは、ますます気持ちを引き締めて頑張ってお参ります。

\*\*\*\*\*

## 5月 🍣春カツオ

春の旬なものというと、春カツオなどがあります。戻りカツオと違い、脂が少なく身がしっかりしています。身の部分が鮮やかな赤で、茶色く変色していないもの、血合いがはっきりとしていて黒ずんでいないものを選ぶと良いそうです。高たんぱく質が臭みの元になり、ワサビでは臭みを消せないため生姜を使うのだそうです。薬味もねぎ、みょうが、大葉、にんにくなどを添えてポン酢しょうゆでいただいたら、最高の一品になりますね。ぜひ、新鮮なカツオに巡り合いたいものです。

\*\*\*\*\*

令和3年5月5日発行

有限会社 幸田建設

<発行責任者>幸田久美

〒969-1204

本宮市糠沢字八幡 1-1

電話 0243-44-3816

<後記>大分、暖かくなり過ごしやすくなりました。通勤途中、青空に鯉のぼりが泳ぐのを見かけ、私よりずっと先の未来を生きる子供たちが生きやすい世の中であってほしいなど、ふと想う今日この頃です。 (ほしの)

♣️正社員募集 大工1名 設計管理1名 一緒に働いて下さる方募集しております。

## ヤマトコトバについて

今回は、ヤマトコトバについて取り上げてみたい。日本語のコトバの起源的なことに触れながら、日頃気づかぬ日本語の面白さについても紹介してみたい。これらは、すべてその道の専門家の著書から拝借している。参考にした本はいずれも片づけをしていたら見つかったものである。

まず、音霊（おとだま）といわれるものから触れてみよう。音霊は、コトバは自然発生がもとになってできたと考える。例えば、「ア」は“光”の音霊をもっているとする。闇の世界・見えざる世界から、光の世界・見える世界に出てくることを「アラワレル」といい、光のあらわれ始める時期を「アケボノ」「アカツキ」といい、その時分の雲の色を「アカネさす」といい、また「アカルイ」という。このように、「ア」のコトバは明るいヒビキを持っていて、笑うにしても「アハハ・・・」と笑えば非常に明るい開けっ放しの感じを与えるのである。これは分かりやすいと言えよう。

次に「イ」であるが、これは生命（いのち）の「イ」、生きるの「イ」であるといい、イノチの発現をさすといわれる。「イ」の付くコトバに「祝う」があるが、これは「イハフ」で、「イノチが生える」の意で「清める」とか「喜び」を表わすという。それと、弓を射するという語の「イる」というのも、イノチを的に鑄（い）込むという意味をもっていると言われる。また、ご飯のことを「飯（イイ）」といい、米ができる植物を「稲（イネ）」というが、いずれも「イノチ」の意味からきているものだ。米は古来日本人の主食であった。

次に「ウ」であるが、「ウ」というのは、「内」に籠り籠ってまさに外に動き出でんとする響きで、「ウー」という声で現される。例えば子を産む、お産の時に自ずから漏れる声で、内にあるものを外に動き出でる時に発せられる。動くの「ウ」である。「浮く（ウク）」という語も、内に沈んでいるものが水面（外）に現れんとする動き、「ウ」の意を表わす。それと、映画や写真を映（うつ）す場合の「映す」というのも、内にあるものが外に映り、外にあるものが内に映る。「現世」を「うつし世」をいうが、これも内にあるものが外に映って現れるという意。また、「映る」から転じて「遷（うつ）る」、「移る」などの語がある。

次に「エ」であるが、「エ」は一つのものから分けるという意味がある。「選ぶ」という語は、一つになっているものを、「分けて取り出してくる」という意である。それと、「枝」というのは、一つもの（幹）から分かれ出しているという意である。また、槌（つち）や杓（しゃく）の「柄（エ）」は、一つの元から分かれて棒が付いていることから「柄」と称されている。

次に「オ」であるが、実は「オ」は「お」のほか「を」がある。「オ」の意は、一つは大きい、偉大であるということ、もう一つは細く長いということを表わす。大きい、尾根、翁（おきな）、長（おさ）などの語や、動物の尾（お）、帯（おび）などの語に「オ」の意味が込められている。

この音霊を紹介するのは「ア行」に止めることにしたい。ここまでいかがでしたか。言われてみると、確かに説得力があって、コトバの成り立ちが領けるような感じがしましたね。

では、趣をかえて別の観点から説を若干紹介したい。日本語の語源（ヤマトコトバ）を音節の複合語と捉えている研究者の説を紹介したい。例えば、「ミ」の後に続く2音節（二つに分析が可）のコトバの場合。「ミ」は神のもの、天皇のものにつく接頭語である。その用例は、「ミヤ（宮）」であれば、ヤが屋であるので「神の屋」ということだ。「ミス」は御簾、「ミカド」は帝、「ミコシ」は神輿、「ミサキ」は御先・岬である。また、「ナ」の場合をみると、「ナ」だけで“中”の意味があり、「ナカ」の「カ」は、「アリカ（有所）」や「スミ（住処）」の「カ」であるという。

さらに「カ」の用例では、「シズカ（静）」、「オロカ（愚）」、「サダカ（定）」、「ノドカ（長閑）」、「ハルカ（遥）」、「ユタカ（豊）」などがある。「カ」の用例と同じ接尾語で使われる

ものに「レ」がある。つまり、「ワレ（我）」、「コレ（此）」、「ソレ（其）」、「イズレ（孰）」、「カレ（彼）」、「タレ（誰）」、「ナレ（汝）」などある。よく見ると結構あるものだ。もう一つくらい見て、終わりとしたい。「ハヤシ（早）」という形容詞がある。勢い激しく前に進む様をいう。また、「ハヤル」という動詞は、事が世に盛んに行われる意で、病気の流行することもある。さらに「ハヤス（生やす）」は木々を勢いよく伸ばす意で、そこを「ハヤシ（林）」という。「ハヤシ」と言えば、能楽や歌舞伎で伴奏者として、笛、太鼓、小鼓などを鳴らして演劇の効果をあげる役目を「ハヤシ」という。このように、コトバの成り立ちを辿ると、結構面白いものだと思う。どうでしょうか。

次に、日本語の面白さを感じ始めたので、さらにその面白さについて観点を改めて見てみたい。

先ず、「面白い」だが、面（顔）が白いことが、なぜ「面白い」なのか。面とは顔のことである。白いといっても、血の気を引いた顔ではない。白は暗闇が去り日光が顔を明るく照らすような状態、或は夜に明かりが顔を照らすような状態をいっている。何事かに興味が湧き、心が朗らかになっているのだ。それが顔（表情）に表れているということで「面白い」となったのである。

以下、身近なことに关するものを幾つか取り上げたい。どんなものが登場するだろうか。○「こんにちわ」と挨拶するのに、なぜ「こんにちは」と書くのか。実は、「こんにちは」は、もとは「こんにち（今日）は、お日柄もよろしく」と言っていた挨拶の後半を省略したものだという。「こんばんは」も、同様に「こんばん（今晚）は、暖かいですね（この部分は変わる）」が省略されたものだ。これは、時が経つにつれて変化していく一つの例だ。○「ありがとう」は、なぜ「有難し」か。「ありがとう」は「有難」という漢語を「ありがたし」と読んだのが始まりである。しかし、これは元々感謝の言葉ではなく、「あり得ない」「世にも稀な」という意味である。ところが、あり得ないことを起こすのは神仏であることから、「ありがたし」は「ありがたくございます」と丁寧になり、今の感謝の言葉となったということである。

○中元とは暦の7月15日のことなのに、なぜ「お中元」はイコール贈答なのか。中元はもともと中国の道教の行事である。正月15日を上元、7月15日を中元、10月15日を下元といって神様を祭っていた。これに仏教の盂蘭盆の仏事が結び付き、祖先に感謝し、霊を供養し、祖父母や父母など目の上の人に贈り物をする風習が生まれた。これが日本には、仏教伝来とともに伝わり、室町時代になると、イキミタマである親に感謝の品を贈った。その贈答の慣習が現在に続き、「お中元」といえば贈答とイコールとなった次第である。○なぜ、スイカ（西瓜）は西で、カボチャ（南瓜）は南か。スイカは室町時代以降に伝えられて、水瓜と称されていたが、他の瓜と区別するために、西洋から伝えられたことを踏まえ、後に西瓜の字が充てられた。一方、カボチャは戦国時代にカンボジア経由で日本に漂着したポルトガル人が種を持ってきた。カンボジアから船が来たので「カボチャ」といい、南蛮国からやってきたというので、南瓜の字が充てられたというわけである。

○嫌な相手を「虫が好かない」というが、この虫は何の虫か。仏教と共に日本に伝えられた道教では、人体には3匹の虫が住みつき、いつもその人を監視しているという。日本では、この3匹が江戸時代になると、仲間が増えて9匹になり、9匹の虫が体内で蠢いて快・不快、上機嫌・不機嫌などの感情（や意識）を引き起こすと考えられた。そこから、「虫が好かない」「腹の虫がおさまらない」「虫のいどころが悪い」「虫酸が走る」「虫の知らせ」「虫がいい」「泣き虫」「弱虫」などの言葉が生まれたという。

今回はこの辺で終わりとしたい。